

目の奥に静かに潜む傘があり
閉じれば涙が溢れてきます

まちりこ（埼玉県）

涙のしくみをこんなふうにやわらかく美しく言い表すことができるのかと心に残りました。

無意味なことばかり
活字として並べ立てながら
人生を全うしたいほどなのです

来栖 優（宮城県）

「無意味」と思うもののなかにこそ世界の秘密は隠されているのかも。そのことを「活字」にしようとするのが詩人の仕事なのかもしれません。同じ作者による「泥濘みに潜む鈍い光沢が／ふとした弾みに綻んでは／活字を欲深くさせるのです」においても「活字」に対する手探りの接近が試みられているように感じました。

猛烈な速さで
たった一度きりの命を失いながら
ファミチキ

鍋島小骨（北海道）

「ファミチキ」にされた鶏のことを語りながら、そこに自らの生を重ねているように読めました。誰もが「猛烈な速さで／たった一度きりの命」を生きている。コンビニエンスストアで手軽に買えるチキンによって、生のはかなさや運命の持つ残酷さがあぶりだされています。

洗剤は買えただろうか
古本に挟まっていたお買い物メモ

猫谷圭希（広島県）

ちいさな「メモ」が教えてくれた本の以前の持ち主の生活のほんの一端。自分の知らないどこかで確かに日常を送っている誰かがいて、今ここに他の誰でもない自分が生きているという奇跡。

号泣したくて
メルカリで
異国のスパイスを探す

広田 土（大阪府）

「号泣」も「メルカリ」も「異国のスパイス」もそれぞれは不思議なものではありませんが、このようにつながりを持って書かれることで未知なる扉が開かれています。メルカリという誰でも参加できるインターネットのフリーマーケットという場の何か思いがけないものが手に入るかもという感じに、「号泣」と「異国のスパイス」がつながるような、でもやっぱりつながらないような。そのよくわからなさに既存の世界がふくらんでゆくような心持ちになりました。

体からずりりと中身抜けだして
眩しいほうに転がっていく

うずたろう（埼玉県）

「ずりり」という語によって「中身」に手ざわりが感じられます。「眩しい」ものに出会ったとき、「ころろ」は確かなかたちを持つ命そのものとなって、いっさんにその喜びのみなもとへと向かっていくのでしょうか。

君がふと窓をひらいて
手をのばしたくなる雨の
予感になりたい

折田 日々希（神奈川県）

「君」への想い、ふるえるような願いに打たれました。心と雨の親和性にも惹かれるものがあります。

リコーダー
一番低いドの音が
吹けるあなたの綺麗な小指

湯たんぼ（宮崎県）

そう言えばリコーダーで「一番低いドの音」を出すために、小指で完全に穴をふさぐのはけっこう難しかったなあと遠い過去の記憶がよみがえりました。それがちゃんとできる「あなた」の「小指」をまぶしく感じるピュアな憧れこそがまぶしい。

やまびこの響きが雨に溶け
やがて牡鹿の喉にとろりと交じる

うずたろう（埼玉県）

自然と牡鹿の身体が渾然一体となる感じが魅力的です。「やまびこ」も「雨」も「牡鹿」も等価に存在している世界。やまびこも雨も時間を含んでいる。その時間が「とろり」という質感で表されているように感じられました。喉に含んだ牡鹿はどんな声で鳴くのだろう。

ホッチキスでせきとめて
からだじゅう、
針が飛び出て愛はぽたぽた

藤ほたる（神奈川県）

暴走しそうな「愛」をホッチキスで「せきとめ」ようにすることがもうすでに暴走。この混沌は誰も身に覚えがあるのではないだろうか。結局、せきとめることができず、血のように「ぽたぽた」と零れ落ちている。「愛」というものの持つ激しさおそろしさを思わずにはいられない。

雨音が聴こえると
銀器を磨く
きっと世界は
滅びてしまったから

翠（東京都）

「雨音が聴こえる」たびに「世界は／滅び」、鎮魂の儀式は繰り返される。生きることの根源にある孤独が伝わってきます。

初夏の日の

きみのきれいなひざがしら

全集をいつ返そうかしら

郡司和斗（茨城県）

韻やリズムが鼻唄のような軽やかさを醸しだしています。初夏の陽射しが「きみ」のひざがしらを一層美しく見せ、「きみ」のひざがしらによって、初夏の陽射しが一層みずみずしく感じられる。「全集」という誰かの生きた証が詰まったものの存在が、二人の関係にも淡く響いています。

建設中のマンションの壁に

耳をあてて

家族団欒の声を聞く

私にだけ吹くビル風

まちりこ（埼玉県）

「建設中のマンション」という日常の風景が、「家族団欒の声を聞く」という行為によって、幻想的な風景へと導かれます。聞こえるはずもない声を聞こうとする「私」の心のありようが胸に刺さり、最後は幻の家族とともに「私」の姿も消えて、透明になった「私」に「ビル風」が吹いているかのようなさみしさに圧倒されてしまいました。

一枚飛ばした紙芝居

二日酔いの朝

道端に落とした

短い物語

降旗 沃（東京都）

日常のふとした場面に裂け目はあって、その裂け目に「紙芝居」一枚分の「物語」が吸い込まれてしまった。そこにはなにが描かれていたのだろう。

終バスの三本ぐらい前に乗り

命をあずけてゆられています

うずたろう（埼玉県）

「終バス」ではなくその「三本ぐらい前」という、わざわざ言わなくてもいいようなささやかな事柄を描くことで、そのバスに「命をあずけて」いるという実感が伝わってきます。わたしたちはいつだって運命の分かれ道にいる。

他にも心に留まる作品がたくさんありました。

来月も楽しみにしています。